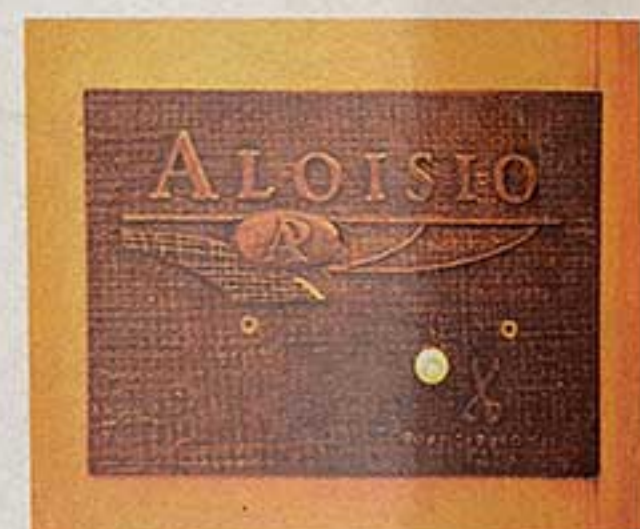


アトリエもその調度品も、彼の美意識に貫かれている。リトグラフや彫刻のほかに、古いミシンとアイロンも蒐集。これはその一部だとか。



アトリエの個性を押し出す仕立てはかえって自己満足に陥る。それよりも荘厳さを滲ませる仕立てを目指したい、と語る。「最近の生地はどんどん繊細になり、より高度な技術が求められています。応える技術革新も必要です」



ガエターノ・アロイジオ

1963年生まれ、カラブリア州出身。少年時代からサルトの工房で遊び過ごす。ミラノのサルトリア・ボロネーゼ、ローマのロツツィのもとで修業。22歳で「金の鉄」賞を受賞し、ヘッドカッターに。1990年、独立。パリ、ロンドン、ニューヨークのほか、スイスやサウジにも顧客。年間500着を仕立てる。オートクチュールを掲げる若き天才。

Gaetano Aloisio: Via D. Chelini, 10 00197 Roma

若き異貌のサルトリア・ロマーナ

Gaetano ALOISIO

アビトにはある種の荘厳さがあるべきです

トミイとジウリオのカラチエニ兄弟が聖地を守り、ルイジ・ガッロが伝説の技を受け継ぐ一方で、若き天才の名をほしいままにしているサルトがいる。

ガエターノ・アロイジオは38歳になったばかりだが、すでにサルト・フィニート（完成された職人）としてアトリエを構えている。

「家族に職人がいたわけではありませんが、サルトの道を歩むのが夢でした。自分の理想とするサルトリアーレを展開するのに、ローマが最も適している場所だと思っています」

アロイジオは顧客のために、パリを往復する。なるほど彼はサルトリアではなくオートクチュールを掲げているし、その仕立てにも古き佳きパリが薫っている。

「とりわけアビトというのは、エレガンスであると同時に、ある種の荘厳さを感じさせるべきだと思うのです。そしてそれがパリに繋がるのなら、否定するべきではありません」

思えばチフォネリがパリに進出したのと同じ時期に、ランヴァンはタイユールを開始し、少し遅れてアルニスが創業した。いわばパリ紳士服の黄金時代が築かれたのだ。そんな時代をアロイジオが無意識のうちに再構築しようとするのは、なぜなのだろう。どう進化していくのか、アロイジオはじつに愉しみなサルトだ。